國學院大學学術情報リポジトリ

神道考古学から祭祀考古学へ：最近の祭祀遺跡研究から見た古代祭祀の実態と神観：特集研究開発推進機構十周年

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2023-02-07
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 笹生, 衛
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001742

神道考古学から祭祀考古学へ
―最近の祭祀遺跡研究から見た古代祭祀の実態と神観―

笹生　衛

はじめに

大場磐雄の古代祭祀像　神道考古学を提唱した大場磐雄は、古墳時代の祭祀の姿について、祭祀遺跡を参考に次のように考えた。

すなわち当代人は一定の場所に斎庭を選定し樹枝（榊のごとき）に石製の剣・玉・鏡を吊し、これを神籬（ひもろぎ）として神霊を招き、その前に多数の土師器や小土器を掘り据え置き並べ、それらの中には御酒御饌を盛り、厳かな祭祀を執行した。終了後祭器具は付近に一括埋納して、汚穢に触れぬ措置をとった。第二回も第三回も、同一箇所で執行せられた。そして同じ場所に埋納された。その都度新しい祭器が作られたから、幾回か繰返された時は、多量の祭器が埋納された。[1]

この大場の見解は、現在も古代祭祀や神社の初源形態を考える上で大きな影響を与えている。そこには、神祭りで使う用具「祭具」は石製・土製模造品や小型の手捏土器が中心であるとの祭祀像と、神霊は神籬（榊などの樹枝）に憑来するという神観がある。しかし、近年の考古学の調査結果や宗教学の研究成果にもとづくと、大場が示した古代の祭祀像とは異なる様子が明らかになりつつある。

そこで、ここでは改めて古代の祭祀と神観について、東アジア的な視点を含めた「祭祀考古学」の立場から、近年の調査・研究成果をふまえて検証してみたい。

一、祭祀遺跡の新視点

祭祀遺跡とは　A.D.四世紀後半から五世紀、日本列島の各地域（東北地方から九州）で祭祀遺跡が明らかとなる。後に述べる「神（カミ）」に対し、貴重な品々を捧げ、酒食を供え生活・生産・交通の平安・安寧を祈る。それが祭祀であり、その痕跡が祭祀遺跡である。

祭祀遺跡の出土品には、次のような共通した品々がある。カミへの捧げ物としては、儀礼用の小型銅鏡、滑石製の鏡・勾玉・剣の模造品があり、カミへ酒食を供える土器には、須恵器の甕や杯、土師器の杯、そして手捏土器と呼ばれる小型土器がある。これらの品々が、特定の場所にまとめられたり、灌漑用水路などへと投入されたりした状況で祭祀遺跡は確認されている。[2]

初期の祭祀遺跡　その初期、四世紀後半の遺跡の一つが、宗像・沖ノ島の十七号遺跡である。十七号遺跡からは直径二七cmに達する大型品を含む多数の銅鏡のほか、刀剣類、石製腕飾類がまとまって出土した。これらの品々は、沖ノ

島の神を象徴する巨岩群の隙間へと差し込み重ねた状態で出土している。[3] これは、祭祀で捧げたままの状態というよりは、祭祀の後に捧げ物を、神を象徴する巨岩のもとへと納めた形と考えたほうが理解しやすい。

宗像・沖ノ島では、全国的に見て早い段階、四世紀後半に祭祀が始まっている。ここには、ヤマト（大和）と朝鮮半島を最短で結ぶ航路上に位置するという沖ノ島の地理的・環境的な条件が大きくかかわっている。[4] そこに捧げた大型の銅鏡や石製腕飾は、奈良県奈良市の佐紀陵山古墳（伝日葉酢媛命陵）のような同時代の大和地域の大型古墳の副葬品と共通し、[5] 祭祀はヤマト王権との密接な関係の中で行われ始めていたことを物語る。

ほぼ同時期、四世紀後半から五世紀前半には、東国でも大和と関係する祭祀の場が成立した。房総半島の先端、南房総市白浜町の小滝涼源寺遺跡である。ここからは、石製模造品や多数の土器類とともに、鉄剣や小型鉄鋌、伊勢湾周辺（伊勢・尾張地域）の土師器甕が出土している。[6] これらの出土遺物は、大和、伊勢・尾張地域と東国との関係性を示唆するものだ。この遺跡は、太平洋を見晴らす場所に立地する。房総半島先端の海域は、大和から伊勢・尾張地域を通り海路で東北地方へと向う場合、通らなければならない海の難所である。そこで、宗像・沖ノ島と近い年代に、初期の祭祀の場が営まれたのである。この海域の安全な航行を願うものだったのだろう。四世紀後半から五世紀にかけて、大和地域の王権とのかかわりで、日本列島の東西に祭祀の場が成立していたのである。

新たな祭祀遺跡　一方で、最近では古墳時代の祭祀の場の細かな状況が明らかになりつつある。その一つが、群馬県渋川市の金井下新田遺跡である。[7] この遺跡は、六世紀初頭頃、榛名山二ツ岳の噴火の火砕流で埋没しており、噴火直前の様子が生々しく残されていた。そこには、祭祀と関連すると考えられる、土器の集積遺構（多数の土器をまとめた場所）が複数残され、さらに大規模な竪穴建物と高床建物を区画・遮蔽する網代垣、それに隣接する高床建物が発見されている。古代の祭祀の場は、大場が想像したような石製・土製模造品などの祭祀遺物や土器類がまとまって出

土するのみの単純な構造ではなく、多様な施設・建物の複合体であった可能性を、この遺跡は示している。

二、祭祀遺跡の実態

次に、最近の発掘調査の成果から復元できる古代の祭祀の実態について述べてみたい。

鉄の捧げ物　近年の祭祀遺跡の発掘調査で最も大きな成果は、古墳時代の祭祀と鉄製品との密接な関係が明らかになったことだ。その代表的な例に千葉県木更津市の千束台遺跡の祭祀遺構と、愛媛県松前町の出作遺跡がある。いずれも五世紀中頃から後半の遺跡である[8]。これまで考えられていた以上に五世紀の祭祀の場で鉄製品が使われていたのである。特に、五世紀代の千束台遺跡の祭祀遺構は、六世紀代の古墳の墳丘でパックされた状態であったため、祭祀の後に片付けまとめた状況が良好に残されていた。ここからは、石製模造品や土器類のほかに、鉄製模造品（斧形など）、鉄製の武器（鉄鏃など）、農具（曲刃鎌、U字形鋤先、手鎌）、工具（刀子、鉋など）、鉄素材（鉄鋌）が出土している。出作遺跡でも、類似した鉄製品が出土した。この内容は、ほぼ同時代の宗像・沖ノ島の二一号遺跡と共通し、東北から九州までの五世紀以降の祭祀遺跡でも一定量の鉄製品の出土が確認できる[9]。

木製の祭祀用具　また、低湿地の祭祀遺跡の調査例が増加した結果、従来、台地上の遺跡では腐朽してしまった木製品が良い状態で確認できるようになった。このため、古墳時代の祭祀では、多様な木製品が使用されていたことが明らかとなった。この代表例が静岡県浜松市の山ノ花遺跡である[10]。ここでは、大規模な溝が掘られており、そこから滑石製模造品や子持勾玉などの祭祀用具とともに多様な木製品が出土した。木製品には、捧げ物を置く案（あん）（机）、木製の祭祀用模造品（船や刀）、楽器の琴、刀の柄や鞘といった刀装具、弓、糸を紡ぐ紡績具や布を織る機織り機、竪杵・

杵、杓子といった調理具まで確認できる。他の五～六世紀の祭祀遺跡でも共通した木製品が出土しており、古墳時代の祭祀では、多くの木製品が使われていたのである。

沖ノ島祭祀と神宮神宝　これら五世紀の祭祀遺跡から出土する品々は、六・七世紀の祭祀へと引き継がれた。それを、よく示すのが、宗像沖ノ島の七号遺跡と五号遺跡である。その出土品は、神宮（伊勢神宮）の神宝（神のための宝物）と一致する。

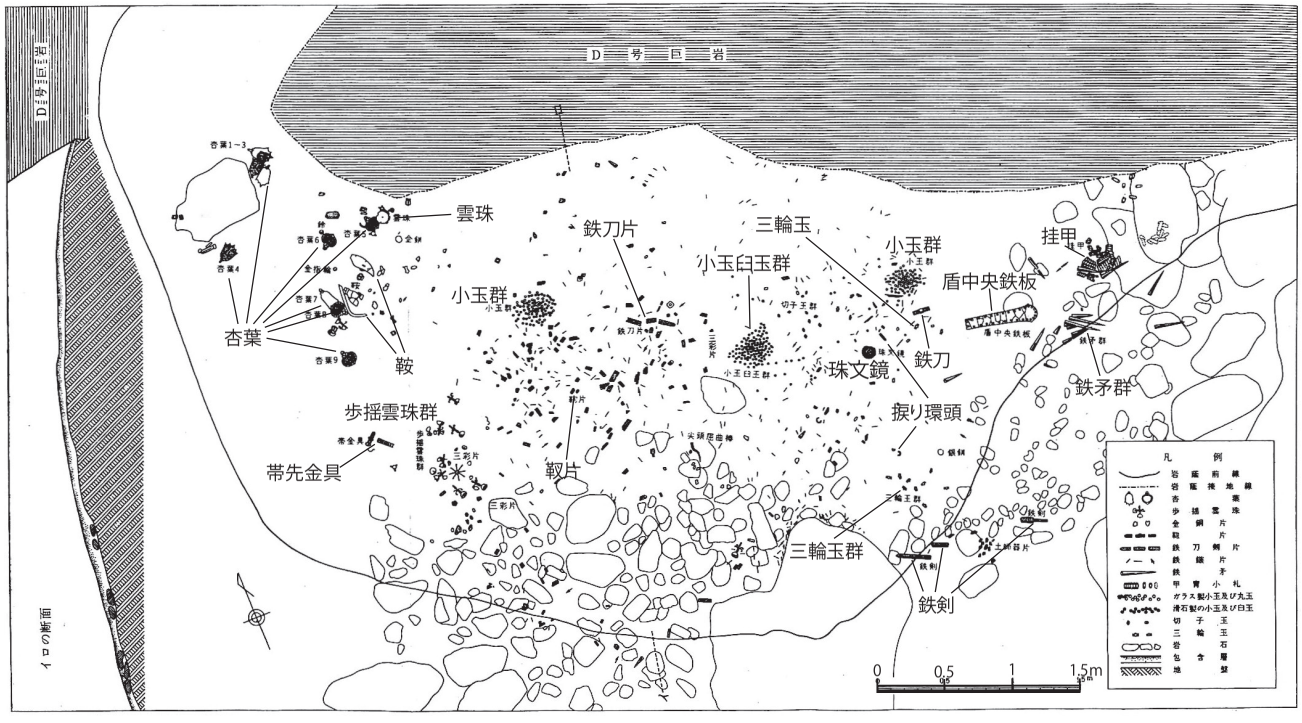
七号遺跡の年代は六世紀代。岩陰に、馬具、刀剣、鏡、鏃、胡籙（矢の入れ物）、玉類、盾形鉄板、挂甲（乗馬用の甲）、鉾などが整然と並べられた形で出土した[11]（**第1図**）。

刀剣には、鉄芯に銀を巻いた「捩り環頭」という刀の柄の飾りと、水晶製の三輪玉が伴う。これらを組み合わせ復元すると、六世紀後半の奈良県藤ノ木古墳から出土した倭系の飾り大刀と類似する刀剣になる。これは、神宮の神宝「玉纏太刀」へと系譜がつながっていく。

さらに、七号遺跡から出土した盾形鉄板は、福岡県の岩戸山古墳の石盾と比較すると、盾の中央に取り付けた装飾鉄板であることがわかる。五世紀の祭祀遺跡からも盾は出土し、それを受け継ぐ資料だ。そして盾は、神宮の神宝に含まれる。また、馬具は、神宮に隣接する月読宮の神宝、神馬の模造品（木彫）の馬具と類似する。

続く、七世紀後半から八世紀の遺跡が、半岩陰・半露天の祭祀の五号遺跡である[12]。ここからは、金銅製の祭祀用のミニチュア（雛形）がまとまって出土している。雛形には糸を紡ぐ紡績具と琴があり、これは、やはり神宮の神宝と一致する。紡織具と琴も、五世紀以降の祭祀遺跡から出土し、その系譜を受け継いだものであると同時に、年代的には、延暦二十三年（八〇四）の『皇太神宮儀式帳』の神宮神宝に直結するものでもある。

沖ノ島祭祀遺跡の出土品、さらに列島内各地の五世紀代の祭祀遺跡の出土品は、伊勢神宮の神宝と多くが共通する。



第１図　沖ノ島７号遺跡遺物出土状況（『沖ノ島　宗像神社沖津宮祭祀遺跡』宗像大社復興期成会 1958 に加筆）

つまり、神宮の神宝は、五世紀以来の伝統を受け継いでいたのである。

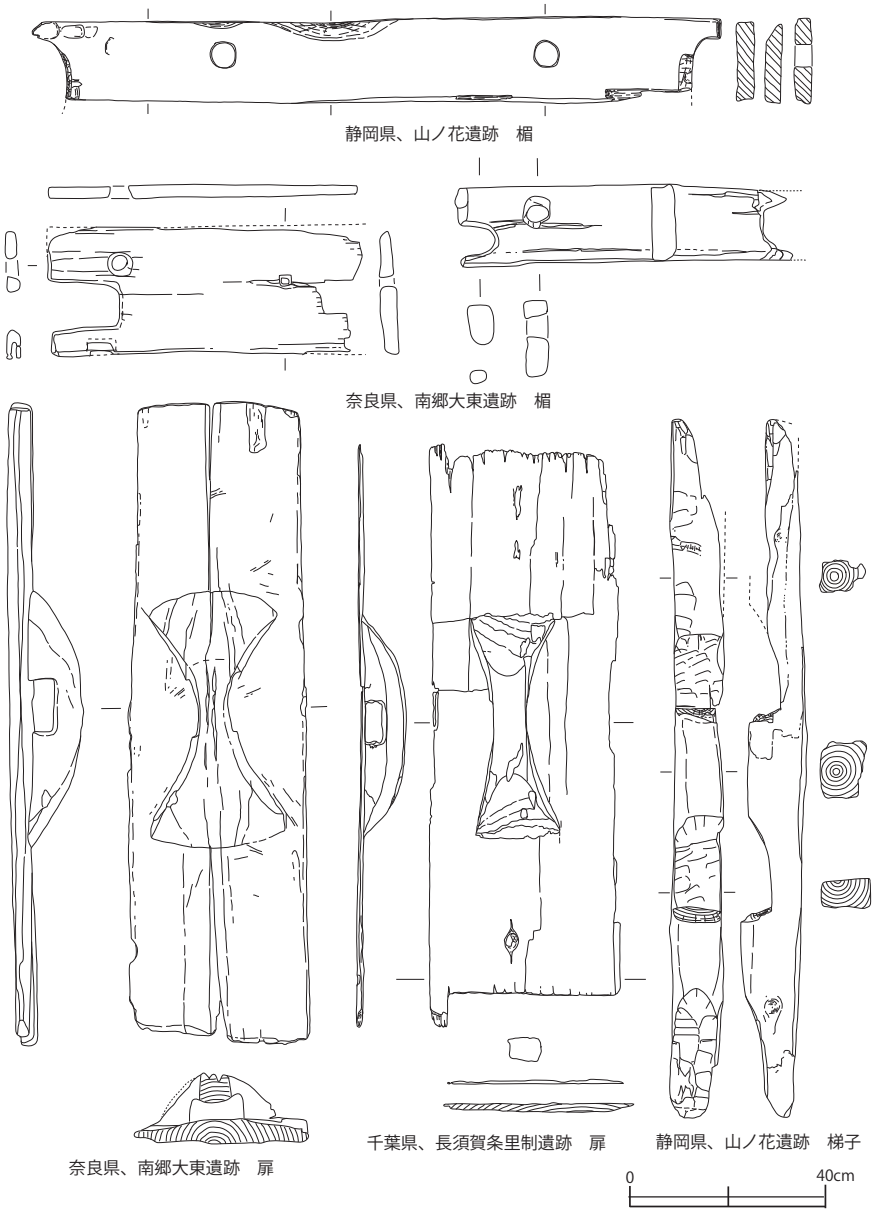
古墳時代の祭祀では、決して石製・土製模造品が祭祀用具の中心ではなかった。様々な鉄製品・木製品、具体的には神宮神宝につながる飾り大刀、盾、紡織具、琴、馬具といった品々が、五・六世紀以来、捧げられ使用されてきたのである。

祭祀の場と高床倉　また、最近の発掘調査の成果からは、祭祀の場の様子が明らかになってきた。五・六世紀代の複数の祭祀遺跡からは、高床倉の建築部材（扉、梯子など）が出土しているのである。[13] **第2図**に示したのは、五世紀代の三ヶ所の祭祀遺跡から出土したものである。門穴がついた扉（閉ざして門で封が可能なる扉）、それをはめ込む部材（楣）、そして梯子である。これら出土部材から、五世紀代、複数の祭祀の場には、高床倉が建っていたと推測できる。

扉を閉ざし門で封ができる高床倉なので、祭祀で捧げ使う品々だけでなく、カミを象徴する優れた鏡や武器などを納めることも可能である。神宮で皇祖神を象徴する「宝鏡」、石上神宮に祀る鋭い神剣「フツノミタマ」に代表される、神を象徴する器物は、このような高床倉構造の「正殿」や「神庫」に奉安されたのである。[14]

区画・遮蔽施設と神籬　さらに、四世紀の奈良県御所市の秋津遺跡では、建物と祭祀の場を板塀で区画・遮蔽していた状況が明らかとなった。[15] 類似した状況は、六世紀初頭の群馬県渋川市の金井下新田遺跡でも確認されている。[16] この遺跡は、榛名山二ツ岳の噴火による火砕流で埋没しており、大型の竪穴建物、掘立柱の側柱建物と高床建物を、高さ約三mの網代垣が区画・遮蔽していたことが判明している。

この塀や垣は、そこで祀るカミへ穢れなどが及ぶことを防ぐとともに、カミの強い霊威が周囲に悪影響を与えないために造られたと考えられる。そのような祭祀の場の様子は、五世紀初頭、兵庫県加古川市の行者塚古墳や、六世紀前半、大阪府高槻市の今城塚古墳の埴輪列に再現されている。行者塚古墳の造り出しには円筒埴輪で方形の区画が造



第 2 図　5 世紀代の祭祀遺跡出土の高床倉部材実測図（註 2 文献による）

られ、中心に複数の家形埴輪を設置、そこへと食膳を模した土製模造品が供えられていた[17]。今城塚古墳の周堤上に展開する埴輪列は、塀形埴輪で四つの方形に区画を作り、その中に大型の家形埴輪を置き、周囲には女性埴輪等の人物埴輪、盾や大刀などの器財埴輪が並べられていた[18]。いずれも、区画・遮蔽された空間と祭祀・儀礼との密接な関係を物語る。

『日本書紀』は、皇祖神を象徴する宝鏡を祀った施設として「神籬（ひもろぎ）」の名称を使っている。「神宮」の原形・起源である。「神籬」とは「神の籬（かき）」の意味であり、カミを象徴する優れた銅鏡を高床倉に納めて周囲を塀（籬）で区画・遮蔽した施設が、その実態であったと考えられる。

古代祭祀の実態　古墳時代の五世紀頃の祭祀遺跡から推定できる。祭祀の実態については、次の特徴が指摘できる。まず、祭祀に当たっては、カミへ供える食膳、捧げ物、そして祭祀で使用する品々は、祭祀の場の近くで製作・準備されたと考えられる。それは、日本列島各地の祭祀遺跡から出土する、石製模造品の未製品、鉄を加工する鍛冶遺構、紡織具、そして食べ物の調理具から裏付けられる。これは、カミへと捧げる品々を特別に作り調理して、清浄さを確保するためと考えられる。そして、祭祀の後、カミへの貴重な捧げ物は高床倉などへ収納されたと考えられる。このような祭祀の構成は、『皇太神宮儀式帳』が記す、古代の神宮祭祀の構成と一致する。

また一方で、酒食を供え、鏡、玉、武器、農工具などの貴重品を捧げる形は、三世紀に成立した古墳の儀礼と一致し、五世紀に成立する祭祀の形は、古墳の儀礼を基礎としていたと考えられる[19]。

三、古代日本における神観

坐す神　では、古墳時代の祭祀で祀られた「神・カミ」とは、いかに考えられていたのだろうか。これには、祭祀遺跡や古代以来の神社の立地環境から、日本列島の自然環境の働きが密接に関係すると推測できる。

日本列島の自然環境は、複雑な地形と四季の変化に富む点に特徴があり、多くの恵みを与えてくれると反面、多くの災害をもたらす。古代、日本列島に暮らした人々は、こうした自然環境の特別な働きに、それを起こし司る「行為者」を直観的にイメージし、人格化して「カミ・神」として祀ったのである。これは、人間の脳の認知機能にもとづくとの指摘が、認知宗教学の観点からなされている。[20]

そして、自然環境の特別な働きが現れる場所は、その行為者「カミ」が居る場所と考えられ、そこで祭祀が行われた。そのような場所に、古代の祭祀遺跡は立地し、古代以来の神社が鎮座しているのだ。これが、八世紀の『記紀』や、十世紀の『延喜式』に記された、特定の場所に「坐す神」の神観である。では、その特定の場所とは、どのような場所なのか。具体的に見てみよう。

交通の要衝に坐すカミ　古代の日本「倭国」の中心、ヤマト（大和）から朝鮮半島へと至る最短の航路上の要所が、玄界灘のただ中で真水も湧く福岡県宗像市の宗像沖ノ島、その途中の大島、船の港湾となる宗像の釣川河口だ。この三ヶ所に坐して、祀られたのが宗像三女神である。

また、大和から東北地方へと海路で赴くのに通過しなければならない難所が、太平洋に突き出した房総半島の先端である。そこに面して立地する祭祀遺跡が千葉県南房総市白浜町の小滝涼源寺遺跡である。この地域には安房神社が鎮座する。宗像三女神を祀る宗像神社には宗像郡が、安房神社には安房郡が神郡（重要な神社を支える郡）として設

定されており、いずれも国家的に重要な神々を祭る場であったことは明らかだ。

さらに、東北地方への入り口で、ランドマークとなる秀麗な山が福島県白河市の建鉾山である。ここは、那珂川の上流、那須方面から、律令時代の「白河の関」を越えてくる陸路と、仙台平野へと通じる阿武隈川の上流が接す地点で、さらに久慈川の上流域とも接する地点である。まさに、東北地方の玄関口であり、水陸交通の結節点ともいえる場所だ。阿武隈川上流の社川に面して建鉾山は聳えている。その麓には、五世紀前半、東北地方で最も古い段階の祭祀遺跡が残り[21]、延喜式内社（十世紀に編纂された『延喜式』に載る神社）である都々古別（つつこわけ）神社が鎮座する。

水を恵むカミ　『延喜式』の古代の祝詞、「広瀬の大忌の祭祝詞」では、水田稲作に不可欠な灌漑用水の源となる山、その水が流れ出る山麓「山口」は、水を供給するカミが坐す場所と考えられている。そのような場所、山から流れ出る川跡に立地するのが、五世紀に始まる祭祀遺跡、奈良県奈良市の大柳生宮ノ前遺跡である。その隣接地には延喜式内社の「夜伎布山口（やぎゅうやまぐち）神社」が鎮座する[22]。

また、千葉県館山市の長須賀条里制遺跡では五世紀の水田と灌漑用水路の跡が発掘調査で確認されている。その灌漑用水路周辺から祭祀関係の遺物が集中して出土して

第３図　建鉾山と阿武隈川上流域

第４図　広瀬神社と大和川

おり、この近くで祭祀が行われたと考えられる。[23]

『日本書紀』が天武天皇四年（六七五）に始まったとする「大忌祭（おおいみのまつり）」は、若々しい穀物の女神「ワカウカノメ」を祀り稲作の安寧を祈るものだ。その祭祀の場は、まさに、大和盆地の河川が合流する河辺に鎮座する、「広瀬に坐（ま）すワカウカノメ神社」（広瀬神社）である。広瀬神社が立地する環境は、五世紀代の大柳生宮ノ前遺跡や長須賀条里制遺跡の立地環境の系譜を引くといってよいだろう。

火山のカミ　日本列島の自然環境の働きを象徴するものの一つに、活発な火山活動がある。これもカミの働きとされた。その代表格が富士山の神である。

富士山は安定的に水を恵む巨大な水源であると同時に、時に噴火し大規模な災害をもたらす。八・九世紀、そのような富士山の働きを起こし司る存在として「浅間（あさま）の神」が直観的にイメージされ信仰された。浅間の神への祭祀は、神の働きが現れる場所、富士山の伏流水が豊富に湧く場所や、噴火を望める地点で行われ、そのような場所に、古代以来の浅間神社（富士山本宮浅間大社・河口浅間大社）は鎮座する。

また、天武天皇十三年（六八四）、太平洋に浮かぶ伊豆諸島周辺で海中火山が噴火して島が出現、人々は神の働きと考えた、と『日本書紀』は記している。これに対処したと考えられる祭祀遺跡が、東京都大島町、伊豆大島の北西海岸にある和泉浜遺跡C地点だ。[24] この遺跡からは、全国でも他に例をみない金・銀の延べ板、各二枚が出土しており、ここでの祭祀の重要性がうかがえる。伊豆諸島の火山活動にカミ・神を直観し祀る伝統は、後に伊豆の三島の神の信仰へとつながったと考えられる。

火山のカミの信仰の系譜は、さらに古墳時代中期の五世紀まで遡る。五世紀後半頃の榛名山の噴火に対処したと考えられる祭祀遺跡が、群馬県渋川市の宮田諏訪原遺跡である。[25] 五世紀後半頃、榛名山の二ツ岳は、火山活動を活発化

させつつあった。これを西に望む地点に宮田諏訪原遺跡は位置している。この遺跡には五世紀後半、銅製儀鏡（儀礼用の小型鏡）と、多数の鉄製の鏃、農・工具など貴重な品々を多数使用した祭祀の痕跡が残されていた。そして、六世紀初頭頃の榛名山二ツ岳の大噴火で噴出した火砕流により最終的に埋没している。火山活動の沈静化を願い、噴煙が立ち昇る二ツ岳を望みながら継続的に貴重な品々を捧げた祭祀は行われたのだろう。しかし、その祈りは届かず二ツ岳は大噴火、祭の場は火砕流に飲み込まれてしまったのである。火山災害の実態と祭祀の関係を雄弁に物語る。

鏡・武器とカミ　古代の日本列島では、自然環境の働きだけでなく、大きく美しい銅鏡、切れ味の鋭い刀剣は、カミを象徴する品、またはカミそのものとして扱われた。皇祖神「天照大神」の宝鏡、フツノミタマの神剣は、その典型例である。これらの品を安置する高床倉が古代以来の神社の中枢として機能してきた。それが、先に述べたように、伊勢神宮（神宮）の正殿であり、『日本書紀』垂仁天皇紀が記す石上神宮の神庫なのだ。

延暦二十三年（八〇四）の『皇太神宮儀式帳』は、「天照坐皇大神」について「御形（みかた）鏡に坐す」と記す。これは、天照大神を象徴するものは「鏡」であるとの意味となる。同じ正殿に祀る手力雄神は「霊（みたま）の御形、弓に坐す」、萬幡豊秋津姫命は「霊の御形、剱に坐す」とある。高床倉構造の建物に奉安した鏡・剱・弓を、神霊・カミの象徴として扱ったことを具体的に示す表現といってよいだろう。

国家領域「天下」と「神」の祭祀　では、今までみてきた古代の日本列島におけるカミと、その祭祀は、どのような歴史的な背景の中で形づくられたのか。改めて弥生時代から経過を辿って考えてみたい。

紀元前後の弥生時代、日本列島の西日本では、いち早く水田稲作を受け入れた。一方、東日本では縄文的な要素が色濃く残り、日本列島の東と西には明確な文化的な差が存在していた。その後、三世紀になると、日本列島のほぼ中央、奈良盆地（ヤマト地域）の纒向遺跡に都市的な大集落が成立、隣接する箸墓古墳で「前方後円墳」という古墳の形が

確立する。[26] 三世紀後半には、この「前方後円墳」を中心に古墳という墓の形、特別な人物の葬り方を、日本列島の東西で共有するようになった。日本列島の東西で文化的に共通する要素が生み出されたのである。これを画期に、ヤマト地域の王権を中核として日本列島内に倭国が形成されることとなる。

続く四世紀、中国の統一王朝「晋」は衰退して滅亡、四世紀から五世紀にかけて東アジア情勢が大きく変化した。そのような五世紀、日本列島では新たな動きが現れる。

埼玉県行田市、埼玉古墳群の稲荷山古墳から出土した鉄剣の金象嵌銘は、「上祖のオホヒコ」からの系譜とともに「治天下」「大王」の漢字を使いヲワケノオミのワカタケル大王に仕えた経緯を記している。これは、冒頭の「辛亥年」の文字から、五世紀後半のA.D.四七一年に記されたと考えられる。この「天下」は倭国の国家領域の観念を示し、あわせて「治天下」の大王、つまり天下を統治する「大王」という認識が、五世紀の日本列島では形成されていたことを示す。当然、「天下」という文字と、その考え方は、中国の漢籍からの影響と考えられる。

「天下」に「坐す神」を祀る　この大王が統治する国家領域「天下」の環境の働きにカミをイメージしたのが、特定の環境・場所に「坐すカミ」という考え方だったのだろう。国家領域「天下」に坐すカミを「大王」と各地の有力者が、貴重品々と酒食を捧げて祀り、恵みを願い災害を防ぐ。彼らはカミを祀ることで「天下」と各地域の生産・生活の安寧を保証したのだ。それが現在に通じる古代祭祀の本質である。古代日本の祭祀は、日本列島の自然環境がもたらす恵みだけでなく災害とも密接に関係しているのである。

稲荷山古墳の鉄剣金象嵌銘が刻まれた辛亥年（四七一）から七年後の四七八年、倭王武は、中国南朝、宋の順帝へと上表文を送っている。『宋書』が伝えた武の上表文には『春秋左氏伝』や『礼記』など漢籍の用字が認められる。[27] つまり、五世紀の日本列島には一定の漢籍の内容が伝わっていたのである。その一つ『礼記』には「祖」「天下」の

文字とともに、「神」の文字が使われている。そして、神を「山林や川・谷、丘陵で雲を出し風雨を起こし、不思議な働きを示すもの全て」と定義、王は百神（多くの神）を祭り、各地の諸侯は、その地の神を祭るとしている。[28]「祖」と「天下」は、稲荷山古墳の鉄剣金象嵌銘に既に使用されており、ほぼ同時期に、日本列島の「カミ」へも漢字「神」を当てるようになった可能性が高いのではないだろうか。

この五世紀代、日本列島の東西で鉄製品や石製模造品など共通した品々を使う祭祀遺跡が明確化した。その背景として、天下の環境に坐す「カミ・神」を、大王と各地の首長・人々が祀る体制が形成されていたのだろう。

終わりに

七世紀、中国に強力な統一帝国「唐」が成立し、東アジアの情勢は再び大きく変化した。唐の圧力を受けて朝鮮半島の高句麗と百済は滅亡し、東アジアには唐を中心とする新たな秩序が形成された。これと並行して、日本列島の倭国は、中国の律令制度を取り入れた国家建設を目指すことになる。

この動きの中で祭祀の場も大きく変化した。皇祖神の宝鏡を高床建物に安置し、籬で区画・遮蔽していた「神籬」は、七世紀中頃、新しい宮殿（難波長柄豊碕宮）の形に合わせて再編成され、「神宮」が成立する。[29] あわせて、皇祖神のほか、香島（鹿島）、出雲を始めとして「天下」の主要な神々の祭祀の場が整備され、それを支える「神郡」が設置された。

神郡が設置された神々は、『古事記』『日本書紀』の神話で重要な働きをする神々である。『皇太神宮儀式帳』「神郡、度会・多気・飯野の三箇郡を初むる本記行事」は、孝徳朝に神宮の大神宮司が設置されたことを伝える。さらに『日本書紀』斉明天皇紀と『常陸国風土記』香島郡条は、六五〇年代から六六〇年代にかけて、出雲と香島の神宮整備を

記している。七世紀中頃から後半、この主要な神々の祭祀の体制や祭祀の場の整備が行われたのである。この直後、七世紀後半には『古事記』『日本書紀』の編纂が始められた。『記紀』神話の編纂は、主要な神々の祭祀の整備を受けて行われていたのである。

そして、七世紀末期、天武・持統朝を経て、「倭国」は律令国家「日本」へ、「大王」は「天皇」へと転換した。あわせて、各地の主要な「祭祀の場」は、律令国家の祭祀制度に組み込まれた「神社」となったのである。

四季の変化が明確で自然の恵みが多い一方で、自然災害も多いのが、日本列島の自然環境である。その働きに神々を感じ、生活・生産の安寧を祈ってきたのが、神社での祭祀であるといえる。そこに、神社と祭祀が、古代の国家形成と深く関わり、長い歴史の中で受け継がれてきた大きな理由の一つがあると考えてよいだろう。

註

（1）大場磐雄「第一部　祭祀遺蹟の研究　考古学上より観た上代の祭祀」『祭祀遺蹟―神道考古学の基礎的研究―』角川書店、一九七〇。

（2）笹生　衛『日本古代の祭祀考古学』吉川弘文館、二〇一二。

（3）宗像大社復興期成会編『続沖ノ島　宗像神社沖津宮祭祀遺跡』宗像大社復興期成会・吉川弘文館、一九六一。

（4）白石太一郎「ヤマト王権と沖ノ島祭祀」『「宗像・沖ノ島と関連遺産群」研究報告Ⅰ』「宗像・沖ノ島と関連遺産群」世界遺産会議、二〇一一。

（5）石田茂輔「日葉酢媛命御陵の資料について」『書陵部紀要』第十九号、宮内庁書陵部、一九六七。

宮内庁書陵部陵墓課編『考古資料の修復・複製・保存処理』宮内庁書陵部、二〇〇九。

(6) 朝夷地区教育委員会・白浜町編『小滝涼源寺―千葉県安房郡白浜町祭祀遺跡の調査―』朝夷地区教育委員会・白浜町、一九八九。

(7) 原　雅信「金井下新田遺跡の囲い状遺構と祭祀遺構について」『平成二九年度遺跡発表会　金井下新田遺跡の謎にいどむ』公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、二〇一七。

(8) 木更津市教育委員会編『千束台遺跡Ⅰ―祭祀遺構―』木更津市教育委員会、二〇〇八。

松前町教育委員会編『出作遺跡Ⅰ　出作圃場整備事業埋蔵文化財調査報告書』松前町教育委員会、一九九三。

(9) 註2文献に同じ。

(10) (財)浜松市文化協会編『山ノ花遺跡　遺物図版編』・『山ノ花遺跡　木器編（図版）』(財)浜松市文化協会、一九九八。

(11) 宗像大社復興期成会編『沖ノ島　宗像神社沖津宮祭祀遺跡』宗像大社復興期成会・吉川弘文館、一九五八。

(12) 宗像大社復興期成会編『宗像沖ノ島』宗像大社復興期成会、一九七九。

(13) 笹生　衛「古代祭祀の形成と系譜―古墳時代から律令時代の祭具と祭式―」『古代文化』第六五巻第三号、公益財団法人古代学協会、二〇一三。

(14) 『皇太神宮儀式帳』「大宮院」の部分の正殿には、「御橋一枚」と「殿扉金鏁一具」が記載されている。「御橋」は階を指し、「扉の金の鏁」からは施錠できる扉があったことがわかる。神宮の正殿は、階と施錠できる扉を備えた高床倉構造の建物であったといってよいだろう。

また、『日本書紀』垂仁天皇八十七年二月五日条に、石上神宮の神庫と関連させながら「天の神庫も樹梯の随

に」との諺の由来を紹介している。「神庫高しと雖も、我能く神庫の為に梯を造てむ」ともあり、刀剣など武器・神宝を納めた石上神宮の神庫は、梯子が必要な高床倉構造の建物と考えられていた。

(15) 米川仁一「奈良県御所市秋津遺跡の祭祀関連遺構」『考古学ジャーナル№六五七　特集祭祀考古学の現状』ニューサイエンス社、二〇一四。

(16) 註7文献に同じ。

(17) 加古川市教育委員会編『行者塚古墳　発掘調査概報』加古川市教育委員会、一九九八。

(18) 森田克行『よみがえる大王墓　今城塚古墳』新泉社、二〇一一。

(19) 笹生　衛『神と死者の考古学　古代のまつりと信仰』吉川弘文館、二〇一六。

(20) パスカル ボイヤー（鈴木光太郎＋中村潔訳）『神はなぜいるのか？』NTT出版、二〇〇八。

スチュアート E ガスリー（藤井修平訳）「神仏はなぜ人のかたちをしているのか　擬人観の認知科学」『〈日本文化〉はどこにあるのか』春秋社、二〇一六。

(21) 亀井正道『建鉾山』吉川弘文館、一九六六。

(22) 奈良県立橿原考古学研究所編『奈良県遺跡調査概報　二〇〇〇年度』奈良県立橿原考古学研究所、二〇〇一。

(23) (財)千葉県文化財センター編『館山市長須賀条里制遺跡・北条条里制遺跡』(財)千葉県文化財センター、二〇〇四。

(24) 國學院大學考古学資料館和泉浜遺跡C地点学術調査団「伊豆大島　和泉浜遺跡C地点―第二次・三次調査の概要―」『國學院大學考古学資料館紀要』第十二輯、國學院大學考古学資料館、一九九六。

(25) 赤城村教育委員会編『宮田諏訪原遺跡Ⅰ・Ⅱ　平成十三・十四年度緊急地方道路整備（A）下久屋渋川線道路

改良事業に係る埋蔵文化財調査報告書―榛名山噴火軽石・火山灰に埋没した古墳時代祭祀遺跡―』赤城村教育委員会、二〇〇五。

(26) 寺澤薫『日本の歴史〇二　王権誕生』講談社、二〇〇〇。

(27) 田中史生「武の上表文―もうひとつの東アジア―」『文字と古代日本2　文字による交流』吉川弘文館、二〇〇五。

(28) 竹内照夫『新訳漢文大系二八　礼記　中』明治書院、一九七七。

(29) 笹生　衛「神の籬と神の宮―考古学から見た古代の神籬の実態―」『神道宗教』第二三八号、神道宗教学会、二〇一五。